

134  
6  
268

一  
藝  
備  
孝  
義  
傳

一  
二  
三



13  
16  
208

館書圖京東				
一六冊	六八號	六五架	一三四函	和書門 傳記類

藝備孝義傳

佐伯山縣

卷三



藝備孝義傳二編卷三

安藝國佐伯郡

嚴崎哲言信

同大西町海老坂登茂助

同牛王前町小濱登格次 同魚店町惣七

附同魚店町十吉侍妻

能美崎大原村道格

大野村久花 同村長六

地味前村惣七同妻久



能美崎中村五席 田下人泣八

嚴崎榎屋八後家さき

原村与左衛門

同村庄七

嚴崎播磨屋仁右衛門 本代源八

屋代村すね

津田村七九席妻すね

安藝國山縣郡

戸谷村茂七

本地村源次席

戸河内村土居原組甚茂

大胡村平次席

同村貞七同妻かぬ

同村助六同妻さよ

同村清十席

土橋村道益同子松益

中祖村吉房さき

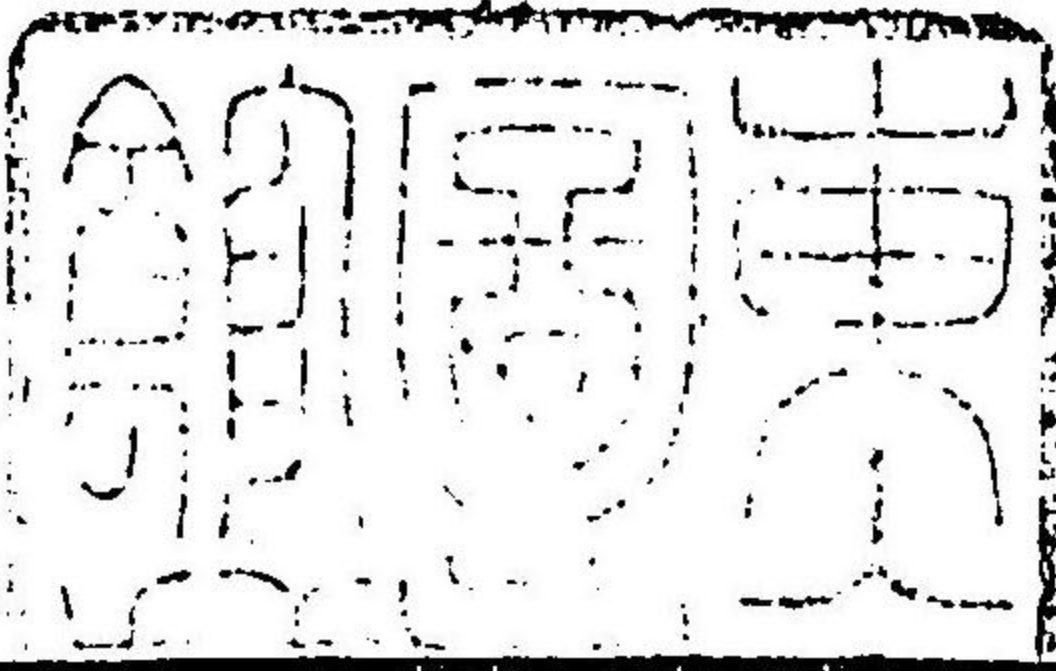
有田村怡仙



孝義傳二編卷三

佐伯郡

○ 嚴嶋誓信



いづくもまよひひとりの心老ありはよふ名を留  
 つまよひまよひぐの調度を取りて人よあつたれ  
 のころらすと居るふの房室よりその餘の僧  
 房もつづから修理することすくもかりだ又古き  
 井をかりとらしく井げたをつくりあらたある  
 壇もつづからまよひまよひきりだして人これを便

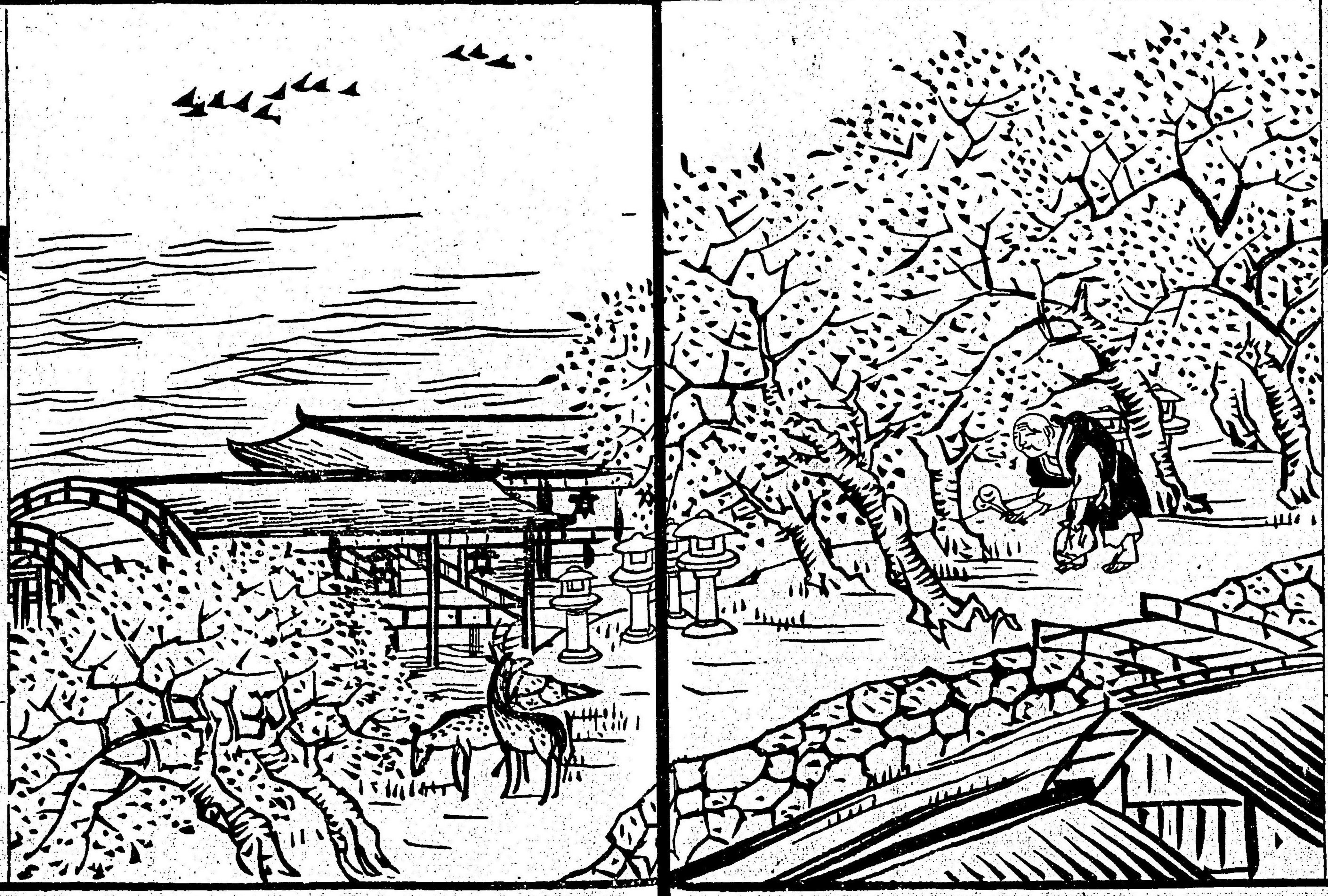


鳥居のまはりに

鳥居

鳥居のまはりに

鳥居

















りふ又山子の肉も熱ととよふあり。これも親も孝  
 あるを以て。格次とひとく銀百八十文ありける。  
 武助と同一日あり。又山子十歳病が妻よあつて  
 一年よもみこゆるよ。十歳病あつてぬ打撃して  
 床よつきけるよ。妻うやまひ養ふまゝ人見て感  
 ずるものおろし。これも寛政三年七月七日。病よ  
 あり。米四俵あつてけるよ。

○能美崎大原村道格

道格の醫師あり。老母ありて孝あり。家業として  
 志けき時よてもよまらよ。こころをこころて母出

れどほひゆきらぬれ。孝もまゝ家の内におも  
 へし。おもあつていひ。おもあつていひ。おもあつていひ。  
 ゆくもや常よ。おもあつていひ。おもあつていひ。  
 その外親族よ。おもあつていひ。おもあつていひ。  
 寛政五年癸丑正月十八日。銀武枝あつて賞せらる。  
 乃松が妻も亦も。皆孝あり。とりお同一十一歳。  
 七月廿一日。乃松孝養をこたら。おもあつていひ。又  
 銀武枝あつてける。



○大野村久花

○回村長六

久花は、大野むらの貧民なり。母年お目もひくれれば、  
 久花はことよりの事なり。母のこころをさぐりて、  
 佛寺にもききし。おひまりぬ。染いよつかさる。船を  
 もとの常は、常は、常は、常は、常は、常は、常は、常は、常は、  
 母のつらかりのわし。妻よ、をいつていらぬ。  
 妻よ、よものものを、よものものを、よものものを、よものものを、  
 久花は、いりし。母が好めるものをもとめて、ゆり  
 ける。たむこい。ことよ、を、を、を、を、を、を、を、を、  
 常は、常は、常は、常は、常は、常は、常は、常は、  
 常は、常は、常は、常は、常は、常は、常は、常は、



大野村久花

回村長六

















孝行記 卷之三

是のまゝして主人の子に衣服などをまことのけり  
 泣ハかゝる人からされは養子よせんとのぞむまの  
 すくろくすゝ後助もまことの恩恵けれど渠がつて  
 承引せぬさうに妻をむろくすゝりてくれまも  
 いるくぬけるが後助年おろして子いすゝ幼少なれは  
 ろんち妻ありてこれをたすけるがこれ殊におも  
 かるべしといふまゝ泣ハさうにすゝりてまも  
 妻をむろくして力をありせはたうけるそのは後助  
 夫婦死すして子五郎といふが弱きなれど泣ハ

孝行記 卷之三



程その家とてさうずしとありま。今やくだくもいも。  
 いときぬ。村長おこもよ。その忠義物を感じて。おあげ  
 くれ。米十五俵。多りりる。寛政五年。癸丑の七  
 月十六日。あり。位八。まよ。仕。お。よ。むりて。四十八  
 年。ありと。い。よ。

○ 嚴崎 樞屋 後八 後家 さき

さき。い。京都。東洞院。の。う。ま。れ。す。り。お。お。う。ら。れ。て。妓  
 女。と。ま。り。大坂。の。新町。ま。ま。け。る。う。十六。の。と。一。この  
 嚴崎。よ。と。う。り。て。樞屋。某。が。内。よ。つ。と。め。り。り。と。い。い。め。の

年。取。も。み。ら。り。け。れ。が。樞屋。後八。と。い。ま。の。一。妻。と。う。り。

一。が。年。三。十。よ。あ。ま。る。に。夫。や。う。て。死。し。け。り。も。と

ず。か。真。一。く。家。よ。さ。だ。す。れ。る。業。も。お。け。れ。が。何。い。と。よ。

世。を。い。り。て。人。の。衣。履。を。洗。ひ。す。う。ぎ。を。う。り。て。舅

姑。を。や。う。ま。よ。舅。の。十。と。せ。ぞ。お。り。て。さ。て。ぬ。今。り

姑。の。と。と。い。ひ。と。や。い。よ。い。あ。つ。く。つ。く。か。の。と。い。ひ。

や。う。ま。い。ける。さ。れ。ど。糧。も。も。一。く。つ。ま。が。け。れ。が

姑。を。ご。う。ま。ら。り。又。旧。ま。り。お。を。よ。せ。り。水。を。と。り。飯。を

か。き。つ。と。め。お。う。り。て。姑。を。ご。う。ま。ら。り。か。く。た。ら。れ







すべしと同伴のへくすめたるが父は物せしむ  
たがうとてやうて馬をぬとひて海りぬ常のきこえ  
めて儉約なるものなれど孝養のなまとりての好も  
費もいらすとす父常は併あましけを好こなれが  
一日もすめすとらふことなましとせ父痢病を  
やうてあやうくどくはれらるなりだきよなれひ  
おまを百二十四日ほど昼夜おひをもあすして  
まのやうしうりかれ才は孫之帝とらふあり別家  
しておひるがなうきまよかをいおちてたすけい  
りぬ孫三帝死して才物甥姪をりておひるのこが

妻のふりよとせらす又秋ごとよ里正の草拾田の  
ためらうしれぬることありらる馬づらしおふ豆飯を  
まのいしんれをむく教ひまふこととむれり辞まれ  
らもあつてやめずとのきよおもくらく里正を食  
すの國恩を報ずるの一端ありとてその人ともり  
け一奉りしおひもるぐ一寛政六年甲寅二月廿  
五日米七俵をたまりぬ。

○原村 五七















せよひぬとて

○屋代村よぬ

○津田村七九郎あすて

よぬり久き病がむきあめちり姉それうよ聲ききふして  
 子も出来ぬるう父真窮よせすりて離縁一けり  
 すぬり家よきて孝順ありりるがこれもその村の  
 甚セが方下女よゆ一けり志るもよ父病よか  
 りて久くくづらひるをもよぬつとめれりよま  
 あれが志むくありてかん痛す重くありていま  
 ぬがひ昼夜つきとひて力をつくせ一が父の病死一

けりその後もや母と姉とをいそぎ一みぬり草  
 履ちきりていりてうらむをいぬ一めしてまを一をい  
 たすくると人のいよむらむかきまの好らひ風の  
 こころもあはれぬ父ようくこれひて厚くおつか  
 なるまの事よもまたいひるもいひていれはれ  
 とも親類のいそぎをいぬ人よぬよ嫁をすも  
 ものあれど母姉の事よのころれひもひて強て  
 その儀がばもちひぎよるり寛政七年十二月考うて  
 米も俵下されける時よと一と十一ありすてハ



津田村源四郎むきあてしと七九郎が妻とすなり  
 舅文な徳が老衰せしあまのれはなまへにすむすり  
 くれがこれも何のよ米五俵あてりらすすては七  
 三十二よりのぬ

山縣郡

○戸谷村後七

後七父の利勢し一信とりよ年あけて目くら  
 て中もおもひやうの叶りざりけの家は信  
 産とてり歳よ三升をさうぐ畑のさありい  
 伏

臘をさしめしきつれは後七日よ人よあてられ  
 ちてかすうよ女をさしめ天のま

世の中いづれに人あまのあまの  
 うらびあまのものを造りてはあまの  
 田まのあてり食をさしめあまの  
 一いあまのあまのあまのあまの  
 くれに人あまのあまのあまのあまの  
 頼いよあまのあまのあまのあまの  
 さいせあまのあまのあまのあまの





又せいのことの口惜くこそわらふとゆふを女びてこの  
 老いこら子まていなりず。弥う佛うまてこそなりぬ。  
 渠さへ居いへば。あをの心たのしみて。あへも世よ  
 ぬらひ一きり。とらりばと。その人よ。かひのける。  
 まことや。孝の口体こくたいを。表りん。まの志こころざしを。あまよ。  
 ちうべ。おのよ。後七が。孝のよ。く。そのの志こころざしを。あへ  
 ち。この。あまよ。く。寛政三年。辛亥。十二月廿七日。  
 果を。あへて。て。賞あほう。よ。ま。

○ 本地村源氏亭







つらとらふ比にたねへておすて重必<sup>おもむき</sup>ゆりて  
 おたねおのち<sup>ち</sup>おのちおのちおのちおのちおのちおのち  
 家せまくれが梁<sup>はり</sup>の上よたふおかたて常<sup>とこ</sup>よしおたねと  
 おたねおのちおのちおのちおのちおのちおのちおのち  
 たらたたらたたらたたらたたらたたらたたらたたらたたら  
 又母をよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
 まよあまよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
 頼<sup>たの</sup>まり母九十五よちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 されどそのまよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

八月九日米五俵かりりける。

○大朝村平次郎<sup>おんあき</sup>

平次郎の権左衛門が子まの菅<sup>すげ</sup>まぬよとて家の  
 産<sup>うまひ</sup>とすそのちすつるる肉よつね親<sup>おや</sup>の好めるもの  
 とていひとるる進<sup>すす</sup>めずとらひるるる父八十五  
 といへておまおのぬ平次郎おまよまげく  
 たとあるよ洞<sup>ほら</sup>き見<sup>み</sup>入<sup>い</sup>りおありれを借<sup>か</sup>りぬ  
 母も老<sup>おい</sup>やとして只<sup>ただ</sup>もけひくくおのぬれが水<sup>みづ</sup>の





いふこといふもなかられしとまららしむも例を離れす

某<sup>そなた</sup>くよありんかぎりの清心やすうれと喜ぶより  
 きうせ<sup>かき</sup>をせぬひつ<sup>お</sup>もしりき<sup>もの</sup>物語<sup>ものがたり</sup>ふとてま  
 母をぢぶさめぐる。寛政五年癸丑正月十八日あつび  
 して米三俵下されるる。

○大朝村貞七回妻か収

貞七はちちのつが子まてか収<sup>あつひ</sup>の石村十助がむすめ  
 るり。貞七よりづ<sup>つ</sup>情<sup>ついき</sup>ふりく<sup>と</sup>友<sup>とも</sup>達<sup>たち</sup>よむじま<sup>い</sup>く<sup>て</sup>よく  
 人のためみを叶<sup>か</sup>つ<sup>り</sup>。か収もたぐひまされる者まて



夫よ、あつこがひ、舅姑よ、つこ、志づらふも、心とゆる、くも、  
 おち病つ、久しく、中風を、やとぬ、友と夫婦、心のかぎり、  
 これを、いし、もり、その死を、かゝり、むす、其、  
 されど、母が、うれひ、と、おとら、く、ま、い、の、ま、い、  
 ちれて、母を、い、何、れ、と、も、し、る、い、ぶ、い、め、る、母も、  
 人よ、あつこ、が、かれら、が、孝、い、を、か、い、り、出、て、ま、い、  
 おと、い、け、し、と、る、ん、夫婦よ、米五俵を、ま、い、て、  
 平次席と、同、一、日、さ、り、と、い、

○大板村助六回妻さま

助六、い、久、右、衛、門、子、よ、と、ま、い、い、い、お、い、む、す、め、  
 夫婦、孝、義、あ、る、と、い、て、友、七、等、と、同、日、よ、米、五、俵、を、  
 ち、り、り、ぬ、状、い、い、そ、く、助、六、か、つ、て、父、を、う、い、  
 ま、い、種、物、を、う、れ、ひ、と、え、く、う、ら、や、ぬ、夫、婦、方、を、  
 あ、り、せ、て、こ、れ、を、い、し、り、る、さ、れ、ど、益、の、田、つ、る、業、の、  
 す、い、か、こ、れ、が、妹、ゆ、り、と、い、け、  
 後、も、す、ぐ、ら、さ、ぎ、さ、す、り、ぬ、か、ら、し、母、死、者、  
 妹、や、こ、つ、き、た、れ、が、夫、婦、大、よ、う、れ、ひ、お、も、  
 妹、と、れ、よ、か、さ、り、て、久、く、母、の、病、を、



獲りてかゝる病とされぬ事と夫婦或いひのこし  
 或はくすり一おほき病をたぐひてかゝる事と  
 或はくすり一おほき病をたぐひてかゝる事と  
 遂に病をたぐひてかゝる事と  
 伊人いふ候をきかせりとのかあもあつたる夫婦  
 といふ

○大朝村清十郎

清十郎は、大朝村の久助が、あつたものなり。父は

伊三郎といひて、おの民より一が眼を、やまて、遂に

とくも、あつたれば、人の米を、とくも、あつたれば、

とくも、あつたれば、人の米を、とくも、あつたれば、

とくも、あつたれば、人の米を、とくも、あつたれば、

とくも、あつたれば、人の米を、とくも、あつたれば、

とくも、あつたれば、人の米を、とくも、あつたれば、

とくも、あつたれば、人の米を、とくも、あつたれば、

とくも、あつたれば、人の米を、とくも、あつたれば、

とくも、あつたれば、人の米を、とくも、あつたれば、

とくも、あつたれば、人の米を、とくも、あつたれば、











吉席き席の幼より。継母よ。や。さ。り。れ。る。人。と。り  
 て。遠く。その。恩。を。お。も。ひ。志。を。ら。く。も。ら。す。事。と  
 る。近き。年。の。母。も。老。ま。り。孫。も。出。来。よ。け。れ。ば。  
 家の。傷。を。ま。ら。ひ。て。母。も。や。す。ら。か。よ。住。め。輕。い。  
 と。く。ま。り。食。物。を。す。む。じ。つ。と。め。て。昔。き。や。う。よ。調。へ  
 ぬ。い。ぬ。す。ま。を。あ。つ。く。て。い。ま。か。よ。風。の。さ。ら。す。を。  
 お。せ。ぐ。母。の。ハ。十。よ。い。え。て。肺。た。ち。か。つ。く。ま。り。多。れ。ば。  
 渠。も。六。十。よ。あ。ま。り。て。頭。を。雪。を。い。た。ま。つ。寺。を。ら。し  
 負。ひ。ゆ。く。ま。ま。人。を。て。か。ん。ぜ。さ。る。の。る。一。又。公。の  
 お。き。と。せ。し。て。い。ま。の。も。と。る。ふ。の。田。も。地。と。ら。よ。あ。い

ければ。負。を。納。ら。つ。ま。か。ま。り。の。よ。よ。き。だ。つ。い。や。  
 一月。た。かり。も。た。や。一。と。る。ん。乃。益。と。回。日。よ。米。三。俵。  
 大。ま。の。て。な。う。び。せ。ら。れ。ぬ。

○ 有田村 怡仙

怡仙。家。ハ。六。代。の。業。を。耕。也。も。り。一。る。怡仙。幼。少。  
 母。を。う。り。る。ひ。継。母。よ。育。ら。る。性。孝。う。て。親。よ  
 く。つ。ふ。父。死。し。て。後。も。継。母。の。恩。義。を。お。も。ひ。て。  
 い。よ。く。ま。い。と。を。尽。し。ぬ。継。母。も。年。老。れ。ば。怡仙。一







書影在二紙

卷三

三



134  
16  
268

東 京 圖 書 館

一 六 冊	<del>二 六 號</del>	<del>六 五 架</del>	一 三 函	傳 記 類	和 書 門
-------------	--------------------------	--------------------------	-------------	-------------	-------------

藝備孝義傳

高田高宮

卷四



北藝備孝義傳二編卷四

安藝國高田郡

三田村法之傳子之傳

有田村才之傳

川根村隆虎

上入江村長松

末女木村長右衛門妻之傳

安藝國高宮郡

中嶋村吉房之傳



水落村ぎん新八

下町西村幸十郎

同村三次郎女きり

同村小三郎

同村五郎市

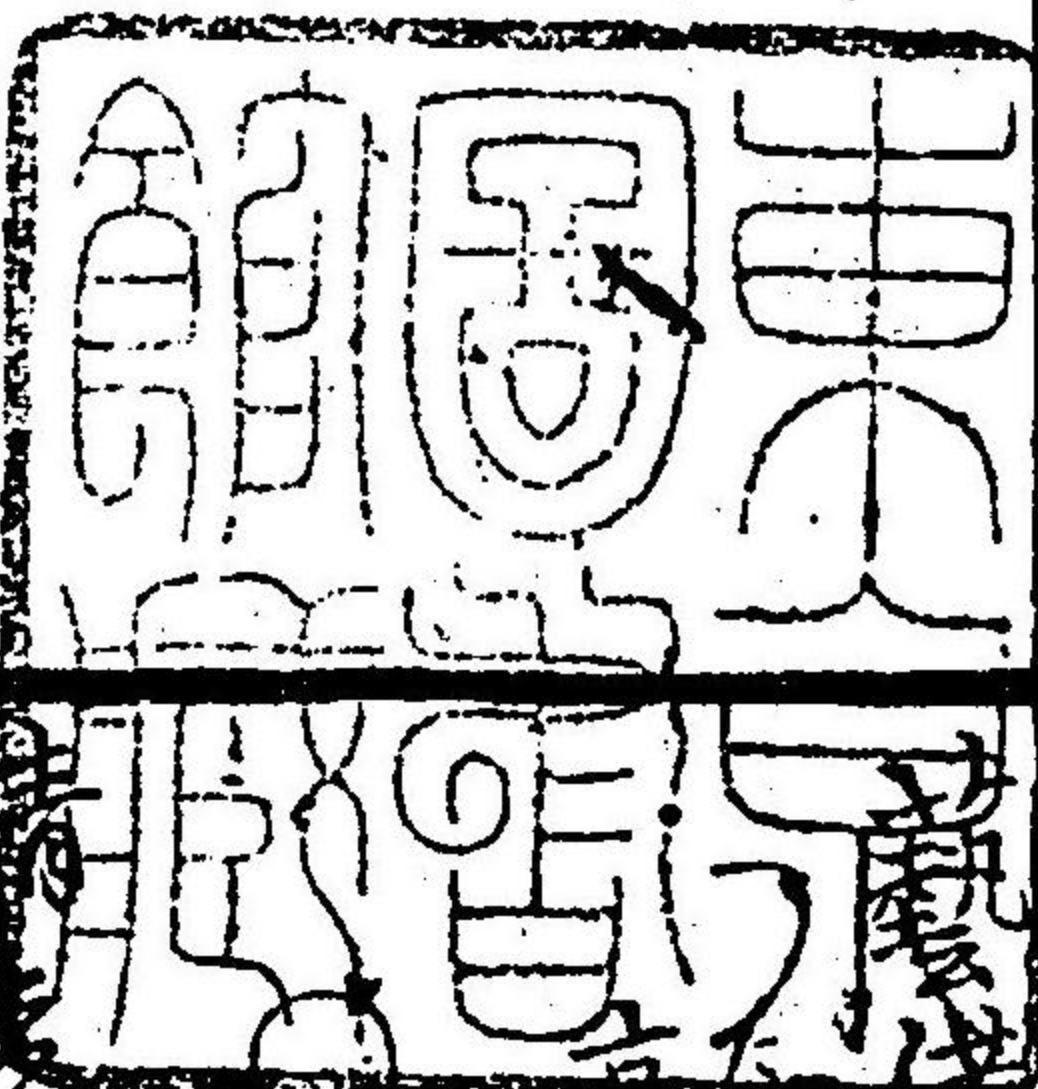
大林村保右衛門

務木村小吉郎同妻むら 附魚

上中野村後四郎

福田村十花同妻里ん

上中野村若松



高田郡 孝義傳二編卷四

高田郡

三田村清吉傳之吉郎

清吉傳之吉郎の兄弟として、ともに父母を孝行し、

父の半田房とらひて、その小吉とらひての事とむ。

家きりめて貧し、兄弟ともよ、十四歳の時より、これ

長七郎とらひて、家よつとよ、いふまゝあれが、薪をこらひ、

あたらして、父母の勞をたすくまへ、味もきつもの

あれ、涼夜風をいさず、さあたら、持ゆきて、親よ



あつここいおちく菜もよ物もよな七島ちうが妻  
 阿たれとて父母よ進すすきもて別わかれあつここつとら  
 己が外の外すうらうへかゝるもあつここつとらかへ  
 辞退なせり。さへ兄弟もよ仕つかちめて家よかきり  
 もつとら父母よいふまゝついで心力をほくける。姉  
 ありて人よ嫁かへ子もあつここて富とみとさうして甚たまら  
 うりけれど父母されをうれよ。渠みちら姉よをへて父母  
 も一い家いよを物ものあつここつとらひもいひしあつここつとら  
 多くとらひてこつとらき一い家いちもいひしあつここつとら

物をあつこける弟のよか後次ごごの同どう村むらより人の家と  
 つぎ妹いもうとも人よ嫁かへたり。うづこも目よ一いたひりぬ  
 事ことの同どう小こ法はうき弟てい妻さいも夫おとこよもさうひしてよ。男おとこ始はじめと  
 らあつここ姉あねに。あつここいひちあつここつとらあつここ  
 よつあつここける。父ちちも母ははも七なな十じゅうよあつここつとらババ小  
 ぎとあつこことも兄弟あにのあつここつとらあつここつとら  
 しあつここつとらあつここつとらあつここつとらあつここつとら  
 養生やしやうのあつここつとらあつここつとらあつここつとらあつここつとら  
 えせせつとらける。かへつとらよの遠とほ方はうますまの風かぜ雨あめのよあつこ











しよとせいの持々しつらひのやとぶきかへしつれハ  
一きぢらよ農業をいつとめらつたあ一きふよ年を  
径のよき地よのちりらんだが本家よより一  
きふとのこ占置せしむとひひらるゝあ人せく  
侍して兄弟いかくことあらまふ一きふものあつと  
あめとやしたりける。村民のうちまよ才きあひひよ  
感して善よろうつりしものをけるとあり。寛政三年  
八月廿三日。智目とことせくとたまらる。同九年。十一  
月廿一日。米三俵あたつる。

○川根村隆庵

隆庵はもと三次郡作木村の産るなり。父を左仲と  
いひしが川根村へ引越しまれり。そめい甚か負し  
かりしが及びやゆらよふらせり。そ身質村よりして  
人をめくむことあつく。あまふくころとありけり。  
又上とらやまひ法度をあつて村民をもとてし  
とてしつらふと一かと一けれが。しつらふ心服し。隣村  
まごもよらつてびもさかめと聞えて。寛政四年。二月八  
日。白銀一枚たまひりける。







日米三徳たまりる。

○果女木村長太郎の妻を

まふい父を善九郎とりの嫁してよく豊始よつよ  
 甚古傳の年八十ふちちぬ始の病つきて是たす  
 ろりけるさるをばくしとれとや一なる二便此  
 けかれもさるにんしんり致と人のあもあれ一めす  
 ししあつらさるるのさるる農事よふつてあふよ  
 出るよのしんあさるるにんあまの家よかしては  
 まつ一のあふさるるあまのあまのあまのあまの

















まうけたりどりどりおき——くも物——くり何うく——  
からんあどいひけれの吉原き徳よりいびてをす  
なきぬきして老父よりなも雨ふる日あるにたつと  
するよじが家業よりある松山交の埋火よりして消やす  
けれの別よよき炭をたくしてを用とるせり老  
人のことるれがふるうう小使することあり夫婦  
それとちればけの衣扱のせんたくはふまする  
——あどいひて何となくあらためきするその餘の  
あつくりいたらぬくすまする吉原き徳曲名業のこまか

あらす訓治細工よしくられの遠近の目くよ  
まりつとひ或い酒よ多ひてひがことひひかんの  
るどあれど昔のき徳やいらうけしてせよあ  
そいざれにいふあ——いひのきりたる人も心と恥て  
あやまりか——こまるよた海——とるん昔らき徳今  
父が財より十倍も——たる百姓とまりて年貢もと  
よりすくぬうよ上をたふしことあつくと又実父  
の近今い兄利三の家をづつとせよくうやまひ妻の  
父をよまへて縁んごうりよせりかく孝友睦姻の







年五月廿九日米五俵をたまはる。こゝろきんこゝろ  
四十新八ハ三十七よりのぬ。

○下町登村幸十郎

幸十郎ハ父聾養子として幸十郎にすれは及ぶど  
ふく離縁せり。家をありて貧しく祖母ハ鑄師を  
惣た馬が家よ。毎日やとりぬ。母も人きごとおとて  
かすうよ。おとてたけが。渠ハ九女よ。おつて  
祖母がゆき。おつておむろひよ。ゆき。夜よ。くれ  
ぬ。おとておむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。

人よ。おとておむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。  
ゆき。おとておむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。  
おとておむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。  
い。だ。家を買つて。うつりたれ。祖母も。母も。おとて  
おむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。  
え。せ。おとておむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。  
れ。り。か。おとておむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。  
おとておむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。おむろひよ。



常ニ孝養をせげぬ渠幼少の時かの熱を患ふと  
 いふもの今まんぢ母祖母よりうまるといひて  
 より長とありて今の志たうりすまらなく孝  
 けせよといひて一且まよふれと力といたすま  
 おろりける幸十郎と一二十歳孝心にやま一涼  
 ければ寛政四年五月廿九日米ぬたこらたまりぬ  
 甲一十年九月廿一日あつてひもたてさう下さる。

○下町五村三次郎女きさち

きさちハ性孝として幼少よりその親をらんと一む  
 こと涼くして秋のころ父猪鹿れめせきよは夜番を  
 すればさびきお田のうらなれどつくもあつて  
 ゆくまお支れ時ふよゆきく落粟をひろひかして  
 およづつておまをへくこつこつろりやあま  
 親まぐりむ十二歳の比ね草山すゆをとり芥  
 まづおまをへくこつこつろりやあまをて父親の  
 きさちのよすのゆめをかひおまめ一とまもるける  
 父三次郎よきさちが孝状を人たつひければ父  
 のいとくさう娘いよける時よ餅くらぶものあつて







人よりゆるいことなり。我おて田よあむ時よかきまふ  
 たづひ事りてこれよあふにうらむことなり。く  
 けれとりひして強てあふれらうらむことなり。て  
 かきかりのなやむことなり。もはらうたう  
 けとひける。三次節も父母よまへつらうらむこと  
 かつて父母のためよまきまき石のやうたるを拾ひ  
 えしてこれを温石として父母の寝のあまよまき  
 孝の父よりうけつたものなり。幸十郎と回  
 日よ米五たさうらあふしてふれよまき  
 十七女よりほまき。幸十郎と回日よ米ふたから  
 下されけ。

○下町登村小三郎 ○回村西節市

小三郎の父を長次郎とり。祖母父母よつらて  
 す。一もをさふことなり。夫婦ともよ  
 農業をまげらつた。後とりつとも老人  
 つよことなり。たらびほまき父よりつら  
 老病年久し。おまき。おまき。おまき。

























父母の衣服をそののらぬとよせりぬ主人より  
 たゞこの料とて日ごとよ錢をあひふるよ。已に烟草  
 を用ひずしてその錢をもたんとてお父母またよ  
 まつりぬ。さき年恨もちて。おらふかり。父がすてよ  
 死して母より。いふ事なく。いふ事なく。母のふすまの  
 志き。牧めすの出入はいたるまじ。とひ伺ひたること  
 なく。すて。母のいふ事なく。おらふかり。父がすてよ  
 母甚よ。いづぬ。おらふかり。年恨もちて。おらふかり。父がすてよ  
 すり。物め。いづぬ。おらふかり。年恨もちて。おらふかり。父がすてよ















けたりしうの家のまへに一かゝるにおのゝかゝるにいふ  
 時若松七女よるりけるがるるにおのゝかゝるに  
 家よゆきりたむこの業にいふといふにいふに  
 いさうに賃せん銭をゆるますに道みちの人よおとなれると  
 して親をやまひとまんん母のおもひをいひらして  
 ちりつゝふることと幼こ者の志こころをならぬあらはれかれる九  
 女の時より母をまもつていひて胸をとまりしは  
 若松家をまもつたまごの業をいふに母がいふは  
 焼やき餅をいふに母が二便のいふに登あがりしは



老義傳二編

巻四

三三



年がらむに... 母のためは、神仏より祈禱をわけ、  
 医者をたてて、病を治す。勤めをせよと人の  
 言ふに、きこひて、いふも、悔しす。あたしくおもひ、これと  
 されば、おもむき、たまひ、さし、けり。けり、かゝるもの、  
 賢より、れして、母を、さかす。いふ、けり。母の、かゝる、  
 けれ、いふ、物に、おもむき、いふ、かゝる、ぬぐ、いふ、  
 され、いふ、けり。けり。母、かゝる、いふ、けり。母の、  
 物ありたる、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 まり、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 候、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 けれ、いふ、母、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 父、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 是、物に、あり、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 親の、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 あ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 医、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

徳川実録

巻四

三



134  
16  
268

孝義傳二編

卷四

三

ぬぐひものも。ありけり。と。寛政十年十月廿七  
日。夢<sup>み</sup>して。米七俵。たまりりぬ。と。若松十四日。  
ありけり。

藝備孝義傳二編卷四終



134  
合 6  
268



